



「令和の米騒動が起こってよかった」

自民党の鶴保庸介参院予算委員長の「運のいいことに能登で地震があった」との発言・失言が紙面等を賑わせている。内容的に軽率の極みであり批判は免れないが、本稿はこれに類似した表現になるが、あえて記しておきたい。「令和の米騒動が起こってよかった」と▼米不足が顕在化し、その原因は地球温暖化・熱暑、インバウンド需要の増加、南海トラフ地震発生に備えての流通等での備蓄増、さらには縁故米の増加等々が指摘されている。そうした議論が行われる中で、水田面積の減少、担い手の不足、低米価による収益悪化で米生産は崩壊の一步手前にある実態と、綱渡りのような微調整による生産調整の実情等が明るみに出され、中長期的な水田政策の見直しを不可避にした。この令和の米騒動が発生せず、無事平穏に推移していたとすれば、掛け声だけの食料安全保障確保に終始したのではないか、と思うとゾツとする▼これまで「干ばつに不作なし」と言われてきたが、熱暑でも雨の降り方が変わって、現状は干ばつとはされないのかもしれない。ここで筆者が最も気になっているのは、温暖化の影響が強調される一方で、寒冷化による不作、怖さが忘れられようとしていることである。近年では1993年の冷夏と日照不足で作況指数は74。2003年は低温と日照不足で作況指数は90。今回の作況指数は実態を表していないということで見直されたが、当たらずとも遠からず。江戸時代の大飢饉による悲惨な歴史を忘れるわけにはいかない。令和の米騒動はそもそも「消えた21万t」がトリガーとなった。低温・冷夏による生産の落ち込み幅は大きく、また地球の大きなサイクルからすれば寒冷化に向かっているというのが通説だ。米需給を微調整していくレベルではなく、大飢饉をも念頭に置いた米政策の構造的見直しが不可欠だ。

(土着菌)